

福祉を学ぶ学生のための教養教育としてのハンセン病研究

相原 朋枝・大野 ロベルト・後藤 隆
斉藤 くるみ・鈴木 久美・田村 真広・辻 浩

日本社会事業大学では毎年オリエンテーションとして、全生園訪問を実施している。教養教育委員会は、毎年行う教養基礎演習担当教員のチェーンレクチャーを、2015年度からハンセン病をテーマとして提供することにした。全生園訪問に続いて、教養教育の教員がハンセン病に関連するテーマを各自の専門分野を活かして設定し、研究し、講義する試みである。全生園の訪問をきっかけに、ハンセン病をより深く、また幅広い視野で学ばせたいという目標は、それぞれの教員が専門分野とハンセン病を結び付けて研究を発展させるきっかけとなった。本発表では、ハンセン病をテーマとした教養教育の一例を提示し、福祉の大学の初年次教育に全生園訪問とハンセン病研究がどのように貢献するかを示す。各自の講義の概要を紹介し、学生のリアクションペーパーや、ディスカッションも参考にしながら、初年次教育に必要な人権感覚の触発や世界観・価値観の構築、学問の有機的なつながりの提示をどのように目指していったかを発表する。

斉藤は言語学・英語学・手話学を専門とし、コミュニケーションや国際福祉関連の授業を担当している。またアジア研修に学生を引率し、アジアのハンセン病療養所での研修も行ってきた。教養基礎演習のチェーンレクチャーでは、国際的な視野でハンセン病の歴史を紹介し、それ以外の差別、すなわち障害者への差別、ろう者を含む少数言語話者への差別、LGBTへの差別、カースト制などに言及し、普遍的な差別と偏見の構造に気づかせること、またその時代にその国でその事象だけを見ても、自らの過ちには気づかないことを教え、従って常に現代的問題だけにとらわれず、幅広い

視野で学ぶことに意欲を持たせることを目標とした。2015年は国際的なハンセン病の状況として、現在の罹患率、制圧国等の状況を説明し、今なお差別されている人々を救う試みHANSEN NOWを紹介した。またキリスト教文化の中のハンセン病の歴史を振り返るために、聖書、ジェフリー・チョーサー、シェイクスピア、オスカー・ワイルド、エリス・ピーターの作品を取り上げた。2016年には全生園訪問前日にあたり、初回のイントロダクションを兼ねたため、同年4月に最高裁判所が特別法廷について謝罪したニュース、映画「あん」を紹介した。その後キリスト教文化の中のハンセン病の描き方を映画「ベン・ハー」等を見せながら紹介した。

学生に語りたかったことは、ハンセン病は差別の対象となってきたが、その現れ方には文化的・社会的価値観で違いがあるということである。ハンセン病差別から見えてくる人類の普遍性はマジョリティー(強者又は多数派)とマイノリティー(弱者又は少数派)の構造である。日本の場合、国家権力が少数のハンセン病患者を隔離・弾圧した極端な構造がある。キリスト教文化の中では、聖職者(多くは権力者)であるためにはハンセン病患者の味方になることが必須であり、フィクションでは悪役がハンセン病患者を虐待するのが常である。それは聖書でイエス・キリストが「らい病もち」を癒したことが大きく影響している。しかし、それが日本に持ち込まれたとき、イエスがハンセン患者の「罪」を消したという解釈になり、ハンセン病患者は罪深いのかと言う論争になった。そして日本の聖職者は旧約聖書と新約聖書の語源を辿り、聖書の「らい」はハンセン病で

はないのいつの間にかハンセン病と解釈されたことをつきとめ「重い皮膚病」と訳しなおし、さらに皮膚病の人への差別を恐れ、「ツァーラアト」と変えた。英文学や西洋の映画で leprosy とされているものを、日本語訳は訳しあぐねている。聖書のイエスが罪を消し去るという意味は人の普遍的罪の象徴であろう。日本的解釈とハンセン病患者への極端な差別が聖書のことばを過敏に解釈しなおさせたのであり、それは真実を知ることにつながったものの、真の聖書の意図とはずれていると思われる。普遍性と特異性を見つけることは学問の目的でもあるし、真理を探るための有効な方法であるということを学生に伝えたかった。

国際的な視野でハンセン病についてのチェーンレクチャーのイントロダクションを行った後、それぞれの教員が自身の分野を活かして、日本のハンセン病療養所についての研究を行った成果を講義することになった。

日本文学を専門とする大野は、全生園の前身である全生病院で短い生涯を全うした作家の北条民雄（1914-1937）について講義した。とくに注目したのは、代表作である「いのちの初夜」である。ハンセン病の診断を受けた主人公が療養所に入院し、自分がこれから暮らすことになる世界の有様に衝撃を受けながらも、それでも生き続けることへの希望をわずかに見出すこの小説は、ハンセン病の当事者が療養所を描いた作品として初めて多くの読者を獲得した貴重なものである。学生には、この作品を通して、ハンセン病患者の実感やハンセン病をめぐる社会の動きに関心を持つことはもちろん、当事者がこのような作品を書くことの功罪や、病と権力によって自由を奪われた人間が作品を書くことの意味について考えるよう促した。

また大野の受持のクラスでは、北条民雄の日記を素材とした講義も行われた。北条の日記は作家の死後、川端康成に託されたため今日まで残ったが、戦前のハンセン病患者の日記はそれ自体、大変貴重である。日記には、北条の文学に対する情熱や、病気に対する不安が記されていることはも

ちろんだが、さらに注目すべきは、社会が自らに対して抱くであろうイメージに対する拒絶反応が、そこに読み取れることである。

北条は短編小説「間木老人」を雑誌「文学界」に発表して文壇デビューを飾る以前から、読者は何より自分がハンセン病患者であることを理由に、自分の作品に関心を持つに違いない、という意味のことを日記に書き込んでいる。つまり読者の側からすれば、自分の作品の文学的な価値に対する関心よりも、社会から隔離され、一種異様な世界と考えられていたハンセン病療養所の内部に対する好奇心の方が強いであろうことを、北条は予想していたのである。そしてこの予想は的中し、読者のみならず文壇も、北条がハンセン病患者であることを強調するような形で売り出していった。

また北条は、療養所内で実施されていた検閲に対して日記のなかで怒りを爆発させている。療養所では、広く世間に向けて発表される北条の小説に対して神経質になっており、療養所の運営や治療法についてマイナスのイメージを与えかねない表現などについては削除を命じていた。ハンセン病患者としての自己を表現することを願う北条にとって、これは致命的である。そのやり場のない怒りを、北条は日記にぶつけたのであった。

以上のように、創作された小説だけでなく、より本人の意志が直截に表れている日記をも参照することで、学生も多面的な視点からハンセン病当事者の置かれた立場に思いを馳せることができると思う。

身体表現を専門とする相原は、ハンセン病と日本の芸能の関係について講義した。

取り上げた「しんとく丸伝説（高安長者伝説）」は、インドを発祥とし、日本に古くから伝わる説話である。頭脳明晰、容姿端麗であった主人公のしんとく丸は、継母の呪いによってハンセン病を患い失明するが、観音の慈悲により最終的に回復する。この伝説から能の「弱法師」、浄瑠璃の「摂州合邦辻」、説経節の「しんとく丸」が誕生している。さらに能の「弱法師」からは、三島由紀夫

によって現代演劇の戯曲「弱法師」が、説経節の「しんとく丸」からは、折口信夫の小説「身毒丸」と、寺山修司・岸田理生の演劇「身毒丸」が生まれている。

講義では、まず「弱法師」を映像とともに紹介し、ここに見られる浄土思想を説明した。次に説経節の「しんとく丸」を紹介した。説経節とは唱導芸能の一形態であり、中世に誕生した。もともとは仏典を説くものであったが、音曲を伴い次第に芸能化する。説経節はその担い手、観客、ともに社会の底辺にある人々（乞食）であったが、その多くはハンセン病の患者であった。中世においてハンセン病患者は「穢れ」であり、罹患はすなわち共同体からの排除を意味した。患者は四天王寺を始めとする寺などに居場所を求め、その様子は「一遍聖人絵伝」に見ることができる。ハンセン病患者が「穢れ」とされたのは、ハンセン病を「業病」と呼んだ当時の仏教の影響が強い。業（カルマ）とは前世の悪行を意味する。業により罹患に至ったのであり、現世の本人の咎ではないため、救済されるには仏にすがる他はない。ハンセン病が不治の病であった社会においては、このようにして信心修行による救済が説かれた。説経節の「しんとく丸」には、観音により救済される主人公にハンセン病患者が自らを重ね合わせカタルシスを得る、このような性質が認められる。

講義の最後には、寺山修司・岸田理生の演劇「身毒丸」を映像とともに紹介した。この作品は「しんとく丸」と、やはり継母物語である説経節「愛護若」が物語のベースになっている。1998年の蜷川幸雄の演出では、学生にも馴染みの深い俳優である藤原竜也が主人公の身毒丸を演じ、高く評価されている。説経節に想を得た作品が現代も演じられている事実が衝撃を受けた学生は少なくないようであった。

社会学を専門とする後藤は『癩患者の告白』を読み解く研究を行い、チェーンレクチャーにも活かすこととなった。それは大正十年（1921）に内務省衛生局が「各道府県立癩療養所長に對して徴し」（編集復刻版『近現代日本ハンセン病問題

資料集』、2003年第2刷、172）、大正十二年（1923）に発表した『癩患者の告白』を読解するための準備作業である。『癩患者の告白』は、「発病當時の感想、隠蔽及治療に對する苦心、社會の患者及其の血族に對する嫌惡、壓迫、遂に故郷を去りて遍歴するに至る経緯」「浮浪徘徊」「收容當時の心理状態」「將來の希望」等を扱った、患者101名の「告白」の記録集である。いわゆる官庁調査が現在でも量的データによるものを主とし質的データによるものはきわめて少ないことを考えれば、この『癩患者の告白』は、上記のように「徴」され、またその目的が「豫防施設の改善適應」などに限定されたものであるとしても、戦前のハンセン病当事者の生活世界に接近するための稀な手がかりであろう。本報告では、①『癩患者の告白』前後の関連法の動向、②『癩患者の告白』前後の関連調査の特徴、③ハンセン病をめぐる「隔離政策」と「自由療養地構想」のせめぎあい、の3つの視点から、『癩患者の告白』に散見される「將來の希望」について注目し、それが「隔離政策」とは異なった「自由」をめざしていたものであったとの仮説を提示する。（この発表をベースとした研究ノート「『癩患者の告白』を読む」を、日本社会事業大学研究紀要（第63集）に投稿予定。）

教育学を専門とする田村はハンセン病の療養所の中での子どもたちの教育と教師の倫理について研究し、講義に活かした。その概要は以下のようなものである。

隔離政策の強化に応じて、ハンセン病療養所内に義務教育施設が整備されていたものの、子どもの教育・学習権が剥奪された状態は継続した。「園内通用学力さえあれば良い」と低質の教育が容認された。そのような学校においても、学ぶことへの意義や希望を見出す子どもや患者教師らの姿があった。

らい予防法廃止運動の結果として、1955年、長島愛生園内に岡山県立邑久高等学校昼間定時制課程普通科新良田教室が開校された。生徒たちが全国の療養所から集い、寄宿舎で共同生活を送りながら学業に励んだ。

1970年代に新良田教室では校内民主化運動が展開された。生徒によるアンケート調査「新良田教室の現状と将来」と座談会が開催され、ベル＝ブザー制の廃止運動が結実し、修学旅行が実施され、進路指導の充実等が図られた。入学生約400人で卒業生307人のうち、225人が社会復帰、24人が大学進学を果たしている。

劣悪な教育環境下にあっても学習する力の下地が築かれた意義は見逃せない。1996年にらい予防法は廃止されたが、廃止の果実は、「全国国立ハンセン氏病療養所患者協議会」（略称全患協）に結集して運動を継続した回復者らによる相互学習の結晶であった。

また、施設内学校の教育実態と教師の振る舞いは、現代を生きる私たちに問いかけてくるものがある。らい予防法は、「らいを伝染させるおそれがある患者」がいた「汚染場所」を消毒し、「使用し、又は接触した物件」を消毒するか廃棄することを規定していた。全生分教室教諭だった鈴木敏子は、のちに次のような自己批判の文章をしたためている。「私はいくら子供と親しくなっても、白衣と消毒を止めることはできなかった。知ろうともしない無知ゆえに、私もまた隔離政策に加担したのだ。」こうした厳しい自己批判ののち、らい予防法廃止運動に参加していった。

学校教師に限らず、専門職者の職業倫理は、たとえ当時の法律に促されたり、時代の風潮に流されたりしたとしても、痛恨の過ちを冒してしまった事実を率直に認め、自己・相互批判することによって磨かれるものであろう。職業倫理は美辞麗句をただ並べたものではない。守ろうとすれば難しく、貫こうとすれば苦難を強いられるような仕事を担うがゆえに、専門職たり得る。療養所内の学校史は、小さくとも偉大な遺産なのである。

以上は療養所についての研究に基づくものであるが、我が国のハンセン病療養所入所者の中には、日本人だけではなく在日朝鮮人もおり、その存在を忘れてはならない。そこで歴史を専門とする鈴木は、「ハンセン病と在日朝鮮人」というテーマで講義を行った。講義内容は次のとおりである。

(1)「ハンセン病を知っていますか」(DVD 企画・製作国立ハンセン病資料館、約15分)と、新聞記事を使い、ハンセン病に関する基本的な事実確認をおこなった。

(2) 在日朝鮮人とハンセン病については、先ず、戦後のある時期における療養所では、一般社会よりも在日朝鮮人の割合が高く、入所者全体の約1割を占める療養所もあったと言われていることを説明した。次に、在日朝鮮人ハンセン病当事者の聞き書き集として、現在も読み継がれている、立教大学史学科山田ゼミナール『生きぬいた証に—ハンセン病療養所多磨全生園朝鮮人・韓国人の記録』（緑蔭書房、1989年）を取り上げ、次にあげる①～⑤の解説をした。①在日と病を生きた生活を語った記録。②強制連行・強制労働の果てにこの病となった人々の記録、③民族的偏見やこの病に対する偏見に加えて、女性または母として背負った苦難を語ったもの。そこには男性と違った独自のものがある、④在日朝鮮人として祖国への想いを語った記録、⑤1932年、同胞患者の会・互助会を創設して身を全生園の同胞患者に捧げた文守奉（ムンスボン）氏の記録を始め、朝鮮人・韓国人としての、また患者としての解放運動を推進した人々の記録である。

さらに、⑤の聞き書き記録の中から、多磨全生園に入所している回復者1名を、新聞資料とあわせて紹介した。

(3) 岡山県にある国立療養所長島愛生園に入所している金泰九氏（日本名は金子利幸）を紹介し、本人著書、『在日朝鮮人ハンセン病回復者として生きた一わが八十歳に乾杯』（牧歌舎、2011年）と、DVD作品「虎ハ眠ラズ」（DVD 2011年、約43分）を取り上げた。DVDは、冒頭の約25分間を鑑賞した。また金泰九氏は、国立ハンセン病資料館の展示室3「生き抜いた証」証言コーナー内でも証言映像があり、視聴することができる。そのため学生には、国立ハンセン病資料館は本大学とも近いこともあり、自らも足を運ぶよう促した。

以上の講義を通して学生には、歴史は過去を学

ぶことで、我々の現在、さらには未来を考えるアプローチであることを学んでもらった。

最後に、ハンセン病のことを考える一つの視点として、辻は天皇制との関係に注目した。

1920年代に優生思想にもとづく「民族浄化」がすすめられ、1936年にハンセン病「20年根絶計画」にもとづいて無癩県運動が提唱されると、皇太后（大正天皇の後）は療養所長と定期的に懇談するとともに、下賜金を出し、絶対隔離政策を支援した。その効果は、天皇の赤子（せきし）としてふさわしい行動をとることが求められていた戦前の天皇中心家族主義国家では大きかった。

このような歴史があるにもかかわらず、元患者の方からハンセン病患者の差別に天皇制が加担したという発言が出ることはほとんどない。それはなぜだろうか。元患者の方は天皇制と隔離政策にはつながりがないと思っておられるのか、それともつながりがあると思っている人でも、それを発言すると当事者運動の足並みが揃わなくなるから控えているのだろうか。その理由はどうであれ、元患者が語らない視点も学ぶ必要があるのではないだろうか。

著書や論文、インターネットでの発言では、研究や社会運動の立場から、ハンセン病と天皇制をめぐる議論がなされている。そこでは一方に、天皇制がハンセン病問題に深刻な影を落としたとして、徹底的に追及しなければならないという立場があり、他方で、ハンセン病に心を寄せてきた皇族を讃えようという立場がある。そして、その中間的な立場もある。また、天皇がハンセン病療養所を訪問した際の報道の仕方には偏りがあるのではないかとの指摘もある。報道では、しゃがみ込んで元患者の手を取り、苦労を察する天皇・皇后

と、それに感動する元患者の姿がクローズアップされるが、それでは隔離政策の本質が見えなくなるのではないかと指摘されている。

同様の姿は、被災地やかつての戦地を天皇・皇后が訪問した時にも見られる。そこでは、犠牲になった人に心を寄せているというメッセージが含まれているものの、政治の権限をもたない現在の天皇制のもとでは、何らかの解決をはかる道筋は示されない。それはまるで、犠牲になった人たちを納得させるシステムのようにも見える。

今日の日本社会はいくつかの犠牲の上に成り立っている。多くの基地を押しつけられている沖縄や原発被害の中にある福島はその典型だが、安全保障法制の下で、新たな犠牲が生まれる可能性がある。日本国民の象徴が心を寄せてくれるが、政治的には何も変わらないということがあってはいけないのではないだろうか。ハンセン病をめぐる問題に学びながら、そのようなことも考える必要があるのではないだろうか。

以上のように、初年次教育としての必修科目「教養基礎演習」では担当の教員が、それぞれの専門分野を紹介しながら、学問研究というものに初めて触れる一年生に、全生園でのオリエンテーションをきっかけとして、ハンセン病と人権の問題を様々な研究方法、様々な視点を提供している。これは、あらゆる学問分野が関連していることを示し、それらが影響し合いながら人の差別意識や過ちに気づくことの重要性を説いていこうとする試みである。幅広い視野に立ち、ひとつの事象を多角的にみること、ひとつの事象を深く分析することを通して、人間の本質や、真理を探究する姿勢を学んでもらいたいと考えている。